

演題 8. 経過中に B 型肝炎ウイルスの再活性化をきたした造血器悪性腫瘍 7 症例の検討

○石倉はる美 栗原惣一 福山光和 大塚喜人(亀田総合病院臨床検査部) 末永孝生(同血液腫瘍内科)

【目的】血液悪性腫瘍患者では治療に伴い HBV の再活性化をきたし重症型の肝炎を発症する事が報告されている。今回当院でも化学療法・移植後に HBV が再活性化した 7 症例を経験したのでその背景、リスクファクターについて検討した。

【方法と結果】2005 年 8 月から 2007 年 10 月までの間に当院血液腫瘍内科にて HBs 抗原が陰性から陽性になった患者を 7 例認めた。これらの患者はいずれも入院時の HBc 抗体は陽性で既感染パターンを呈していた。これらの背景を検討するため同時期に血液腫瘍内科より HBc 抗体の測定依頼があった 176 例中、HBs 抗原陽性例を除く 145 例(男性 91 名、女性 54 名、平均年齢 62 歳)について比較したところ、HBc 抗体が陽性は 42 例、陰性は 103 例であった。われわれの経験した HBs 抗原の陽性化症例はすべて初診時 HBc 抗体陽性例であった。さらに治療との関連では 7 例のうち同種造血幹細胞移植症例が 3 例、化学療法を受けた患者が 4 例であったが、興味深いことに化学療法を受けた患者ではすべてにリツキサンの投与が行われていた B 細胞型リンパ腫であった。また、HBs 抗体の有無は HBs 抗原の陽性化との関連はみられなかった。一方 HBc 抗体陰性患者よりの再活性化をきたした症例は見られなかった。移植症例に限って検討すると移植患者で HBc 抗体が陽性であった 16 例中 3 例(18.7%)で再活性化がおこっている事が判明した。一方化学療法では再活性化率は全例で HBc 抗体が測定されていないので不明であった。

【結語】HBc 抗体陽性の患者にとって、リツキサンを含む化学療法の施行と同種幹細胞移植は HBV の再活性化の危険因子となり注意が必要である。

連絡先 04-7092-2211 (内 3444)